

井上ひさしさん死去

劇作や小説「吉里吉里人」

軽妙なユーモアをたたえた優れた日本語で「吉里吉里人」「國語元年」など多くの小説や戯曲、エッセーを書き、平和運動にも熱心に取り組んだ作家・劇作家で文化功労者の井上ひさしさん（本名・井上廈 くいのうえ・ひさし）が死去したことが11日、わかった。75歳だった。

山形県小松町（現川西町）生まれ。5歳で父と死別し、経済的な事情から一時、児童養護施設で育った。仙台一高から上智大に進み、在学中から浅草・フランス座で喜劇台本を執筆。卒業後、放送作家となり、1964年にNHKの人形劇「ひょっこりひょうたん島」の台本を山元護久氏と共作し、鋭い風刺と笑いのセンスで注目された。

69年には劇団テアトル・エコーに「日本人のへそ」を書き下ろして本格的に劇作家デビュー。72年、江戸の戯作者を描いた小説「手鎖心中」で直木賞、戯曲「道元の冒険」で岸田国土戯曲賞を受賞した。

東北の一寒村が独立してユートピアをめざす小説「吉里吉里人」（81年）をはじめ、「不忠臣蔵」（85年）、「東京セブンローズ」（99年）、戯曲「天保十二年のシェイクスピア」（74年）、「化粧」（82年）など、壮大な想像力と平明で柔らかな日本語を駆使し、大衆的な笑いとは深い人間洞察を両立させた秀作を多数執筆。エッセーや日本語論でも活躍した。

83年には自作戯曲を上演する「こまつ座」を旗揚げ。「頭痛肩こり樋口一葉」（84年）、太宰治を描いた「人間合格」（89年）、林芙美子が主人公の「太鼓たたいて笛ふいて」（02年）などの優れた評伝劇や喜劇を次々と上演。97年には新国立劇場の開場公演「紙屋町さくらホテル」を手がけた。同劇場には庶民の戦争責任を問う東京裁判3部作「夢の裂け目」（01年）、「夢の泪」（03年）、「夢の痂かさぶた」（06年）も書き下ろし、10年4月から3部作連続上演が始まった。09年に初演した「ムサシ」が10年にニューヨークとロンドンで上演される。

04年には「九条の会」の呼びかけ人の1人となるな



ど護憲・平和運動にも積極的で、日本の右傾化に警鐘を鳴らし続けた。原爆で生き残った娘と亡父の交流を描いた戯曲「父と暮せば」（94年）は映画化もされた。

膨大な資料を渉猟後、ユニークな発想で創作するために筆が遅く、「遅筆堂」を自認。戯曲が完成せず公演の開幕が遅れることもたびたびあった。87年、故郷の川西町に蔵書を寄贈して「遅筆堂文庫」が設立された。

日本ペンクラブ会長、日本劇作家協会会長などを歴任。直木賞、岸田戯曲賞、大佛次郎賞などの選考委員を長年つとめた。99年の菊池寛賞、00年度の朝日賞など受賞多数。04年に文化功労者、09年には芸術院会員に選ばれた。

09年10月から体調不良のため静養していた。